

場へやつて來た。其中の一人は悲みに堪えないので娘を焼く火の中へ飛び込で死でしまつた、次のは娘の骨と灰とを集めて火葬場の邊に小屋を造て之を守つた、三人目のは僧となつて外の國へ行脚に出掛けた、四人目のは其儘で自分の家へ歸つて行た。

行脚に出掛けたのが、或る國で或る婆羅門の家に行つて中食を乞うた。家に居る婆羅は『業の御僧、さ御上りなさい』といつて、食物と場處を作て呉れた、其處で家へ這入て食事をしやうとした處が、家中で小供が泣き出した。婆羅門の妻は其小供を燃えて居る火の中へ投げ込んだ。其を見て行脚僧は驚いて、其の家を逃げ出した。處が婆羅門は之を引き戻した。そこで僧は云つた『あんな恐ろしい事をするのを見た家でさう一緒に食事をする者か、鬼の様な所行を見た家でさうして食事が出来る者か』。其を聞いて其の家の主人は家に入つて何か卷物を持て來た、そうして其を開いて一つ呪文を唱へた、處が灰に成つた小供が生きて來た。行脚僧は此の不思議を見て考へた『あの一軸が己れの手にいたら、其れで戀人を生かさう』。そう決心して其處に身を隠して潛んで居て、夜になつて家中に忍び入り、其の卷物を取り出して、其處から直ぐ火葬の處へいそ

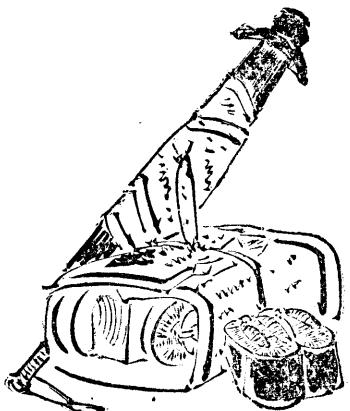
火葬場に残て居たのが歸つて來て行脚僧に問うた『おう友達、他國に行つて何か新しい事も知れたか』。僧は云つた『友達、己れは人を生かす法を得て來た』。對手は云つた『そんなら、己れの戀人を生かして呉れ』。其を聞いて僧は卷物を開て其の呪文を唱へた、處が其の功力蘇生した。自分の家へ行つて居た四人目のもの之を聞いてやつて來た。其處で四人が互に嫉妬反目して到頭争ひを始めた。

『此爭如何に收るべしや、娘は何れを其夫と擇ばんか、甚難問なり、之が解釋は韻文にて左の意味なりし』
『娘の再生の恩ある人は、生命を與へし父なり、娘と共に死せしは又共に再生せし故に其の兄なり、灰骨を集めて火葬場に留りしは卑しき業を執りし者にして奴僕なり、家に歸りし人ころ娘の夫なれ』。
〔詭辨甚面白からずや〕

芝居よしあし草

賈 阿彌

▲畫面の見得と自然の見得
團十郎 このほど述懐して申しけるには『凡そ俳優が舞臺に現はれるとまづ多數の見物の目にとまるのは形の善惡にあるやうでござります形の悪い俳優は假令藝に見せころがあつても一概に下手とけなされるやうな譯で……それですから形には餘程氣を入れねばなりません、これはほんの心附でございますが寺島（菊五郎）といふ男は随分形を氣にする質で角の極りが皆な畫面になつて居ります勿論寺島は畫面に基いて形を揃へるのでですから私共の考へますには總て體の取成しは成るべく實地に基きて無理をせず芝居と實地とを別るものにせずして實地斯くあるべきと思ふところへ體を持込むでさへのければ我知らず自然と形が附いて好き見る



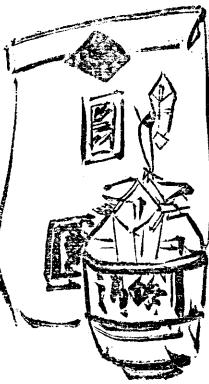
▲兩優の門人薰陶法
堀越と寺島との間には門人を教ふるに自ら差違あるなり居るなり、ム、呼吸は是でげすイヤサ團洲の呼吸はウナ……

▲兩優の門人薰陶法
堀越と寺島との間には門人を教ふるに自ら差違あるなり居るなり、ム、呼吸は是でげすイヤサ團洲の呼

囃せども今は演ずる者の下手なるに由るなり『菊畑』の作意は極めて賑かに出来居りてまこと上手が演じなば如何様にも陽氣なる一幕となすことを得べしと、われ團十郎の鬼一法眼を見て、そぞろに秀鶴の一言世を欺かざるを憶ひ幾たびか歎聲を繰かへすを覺へざりき。

▲名古屋と柳原

秀調が口を極めて褒めちぎりたる名古屋の見物に對し若音羽屋の菊之助は大に江戸ツ子を揮舞はせしとかやその言に曰く「名古屋へ來てはまづ向柳原の柳原座に出で氣で舞臺を勤めあいと逆も場受は致しません」と、これが大層彼地の癪に障りしと見え新聞の劇評には厭味百萬遍書きつらぬ西駕座中幕の寺子屋不許なりと申すも事の起りはこの邊より來て居るとか居らぬとか……成程讀めたり秀調が眞の歎劇眼を具へたりと褒めたも爰のことなるべし東京へ来て東京を悪口する役者もあれば名古屋へ行きて名古屋をけなす役者もあり兎角世の中は甘く埋合せの附たものなり。



歌妓年中行事

あ
か
つ
き

づわが持役の心如何と會得するの一事にある……辨慶
は辨慶政岡は政岡とよくこの心さへ呑込むでおけば舞
臺がおのづと活々として躰の取成しは苦もなく附て来る
ものだ若手の者はこゝの心掛が肝腎であるぞ』と、菊
五郎は則ち曰く『イヤ若い奴等は何でも故人の形を覺
へるのが一番だそうして躰の取成しを悉皆會得してお
かないと幾許その役の心を呑込でも第一芝居の出来ぬ
俳優になつて了ふぞ……心うして……心を呑込み
なぞ、いふのは充分型を會得した後のことでは是から俳
優らしくならうといふ若手の爲る仕事ではないと思
ふ』と、或人之を解釋して申しけるには團洲は門人養
成の秘訣専ら心の會得にあるが故にその家多くは芝居
下手の俳優を出す試みに思へ權十郎といひ八百藏とい
ひ新蔵といひ猿之助といひ團洲門下現に錚々の名を博
せるものは悉く是れ他門出身の人にして中年以後始め
て團洲の師事したるに過ぎずその俳優としての生活に
おいて所謂藁の上より團洲に仕立てられしものとては
蓋し團八以下下名題下の數人に外ならざるべし之に反し
て梅幸の門下より出づるのは師の教ゆるところ既に
まづ故人の型にあるが故にいかなる名題下新相中とい
へどもその小手の利くこと實に驚くべく取廻しの小奇

麗なるは遠く市川の黨の及ぶところにあらず左れば往にして役の心とは似も寄らぬ見當ちがひのものを出すことあるは惜むべし要するに團菊兩優の薰陶法を折衷して後へに完全なる發達の途を開くに至らんか云ふと熱心に物語りたることありきア、團十よし菊五また恐からず之を折衷して一方に偏することなくんば則ち梨園の幸福なり。

▲秀調と八重垣姫

秀調いふ「堀越さんの八重垣姫は皆自分が教へたのです」團十郎いふ「私の八重垣姫は壽美藏に瀧野屋の型を聞かせて萬事それに由りました」秀調いふ「その時教授料として堀越さんから鰻を二片貰ひました」團十郎いふ「鰻をやつたかどうだかモウ頓と覺へません」秀調非なるか團十郎非なるか秀團の言到底兩立すべからず左れど松之助の勤めたる濡衣をわが持役なりしかの如く吹聴せし駄法螺より致ふれば秀調の足元餘程危しと見受けたり團洲何すれば以なくして世を欺くの陋を学ばんや呵々好笑

▲仲藏の言を憶ふ

梨園の老彦左かつて新富座の裏屋に語りていひける様世間にては「菊烟」の鬼一を陰氣なるものゝ如く言ひ